九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

『子どもの社会力』シリーズを＜読む＞　門脇厚司著

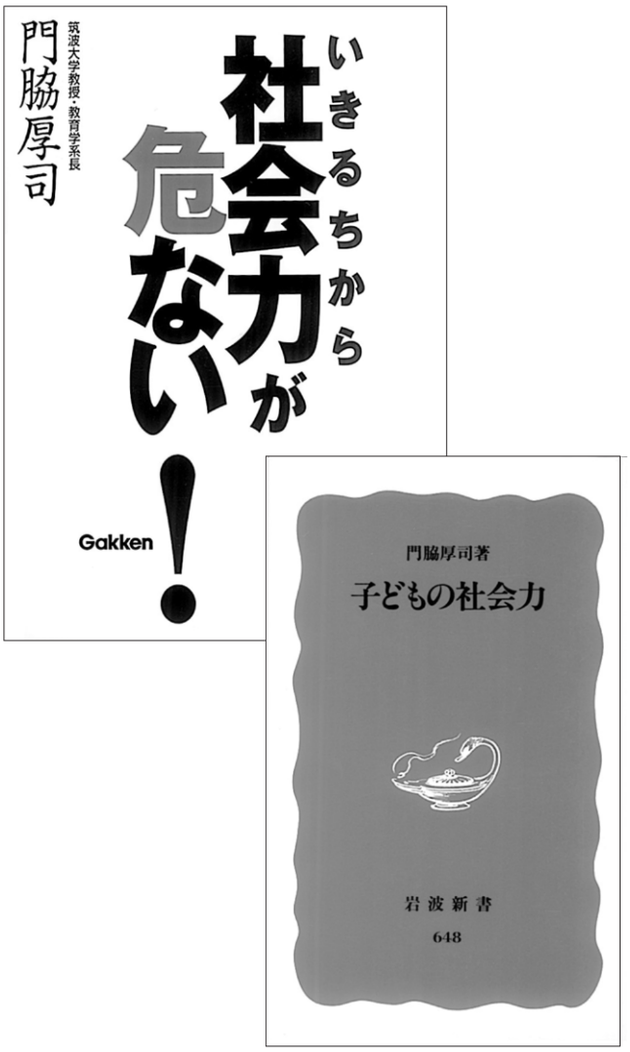
森山，沾一
福岡県立大学人間社会学部人間形成学科・大学院

https://doi.org/10.15017/9025

出版情報：生活体験学習研究. 2, pp.95-97, 2002-07-31. 日本生活体験学習学会
バージョン：
権利関係：

日本生活体験学習学会誌　第２号　95―97（2002）

『子どもの社会力』シリーズを〈読む〉



１．はじめに

「日本の子どもの凶悪犯罪率はアメリカ、イギリス、フランス、ドイツ、カナダ、イタリアよりも低く、また犯罪者の検挙率もどの国より高い」と書けば、読者の方々は驚かれるだろう。マスコミはこのことをほとんど報道しないで、子どもの事件報道で煽っている。実際、アメリカに比べれば犯罪率は６分の１、逮捕率は６倍である。しかし、アメリカ型社会が進行する中、この格差はどんどん縮まってきている。

このことが問題なのである。

門脇厚司氏の①**『子どもの社会力』（岩波新書　1999年12月）**、②**『「大人」の条件―「社会力」を問う―』（佐高信氏との共著　岩波書店　2001年４月）**、③**『社会力（いきるちから）が危ない』（学習研究社　2001年11月）**は、この理由と「ではどうすればいいか」に答えてくれる。

「社会力」の創始者門脇氏は、「社会的存在たるに相応（ふさわ）しい人間の資質能力をよぶ」とする。そして、「心理学の専門用語になっている感のある『社会性』なる用語が、すでにある社会に個人として適応する側面に重きをおいた概念である」のに対し、「一つの社会を作りその社会を維持し運営していく力という意味を込めている」という（『子どもの社会力』「はじめに」「社会力とは何か」64頁）。

「わが国の若い人々に欠けているのは社会への適応力というより、自らの意思で社会を作っていく意欲とその社会を維持し発展させていくのに必要な資質や能力である」と考える氏は、その原因と人間の能力形成、社会力を培うために大人がなすべきことを論じていく。もともと、教育社会学の青少年文化論専攻である著者が20年以上前から、「子どもの異変」に気づきはじめ、24冊のノートをもとに書かれたこの新書は、実証的でかつ説得力がある。子どもの〈関係力の崩壊と再生〉を主張していた私にとって、教えられ、共鳴すること大であった。

①～③は別にシリーズと銘うっているわけではない。しかし、数多くの著作を持つ、門脇氏が「癌の手術を受け医者に再発を宣告され、死を意識しながらも、21世紀半ばの人類の危機にむけて残す、警世の一連の書」（福岡県アンビシャス運動推進大会講演2001年11月）であり、三冊を考えてみることにした。

２．どんなことが書かれているのか

①**『子どもの社会力』（岩波新書　1999年12月）**は学術的積み重ねと深淵さをもちながら、わかりやすい表現で実践まで提案した新書。全部で５章の構成は次の通り。Ⅰ子どもの育ち方にどんな異変が見られるか／Ⅱ社会を成り立たせる人間の条件とは何か／Ⅲヒトの子の社会力はどのように形成されるか／Ⅳ子どもの成育環境はどう変わったか／Ⅴ子どもの社会力をどう育てるか

これらは現状の異変、G.ジンメルの相互行為存在と

しての人間、社会力の根源がつくられる仕組み、子どもを取り巻く環境の激変、どのように社会力を育てるか、が詳しく述べられている。

ただ、新書という限られた紙数であり、子どもの環境や現状の変化、社会力の概念説明、社会的存在である人間の本質説明にページをとられている。「社会力をどう育てるか」の説明は、③で展開されるが、ここでは事例にとどまる。

それでも「子どもに応答する大人の責任」「父親たちの子育てかかわりへのよろこび」「学校と地域への積極関与」「CCC 運動」「東京りす・とら計画」「ライネル・プラン」「冒険遊び場」「プレイリーダーという専門職」「羽根木プレイパーク」など数多く紹介されている。

②『「大人」の条件―「社会力」を問う―』（岩波書店 2001年 4 月）は山形県庄内地方同郷で 4 歳下、佐高信氏との対談を中心としたものである。

佐高氏は『現代を読む―100冊のノンフィクション』（岩波新書）や大蔵官僚批判などをリベラルな立場から続けている高校教師も体験した評論家。氏は「まえがき」で、「地域は子どもたちがさまざまな人に出会うことができ、さまざまに異なる体験ができる場」であり、「学校ならぬ会社に閉じ込められがちな大人にとっても、そのままあてはまる」という。そして、人が育つ環境を大人自身が自ら変わることによって作る必要を説いている。

第 1 章「社会力」がなぜ問題か／第 2 章人が育つ環境とは―共通体験を思い起こしながら―／第 3 章〈大人〉の条件の内容。

さまざまな人間模様と人物が登場する。社会力の行き着くところは「家庭、仕事、地域で社会を構成する人間として、その運営に積極的に関わっていくシティズンシップ（市民性）である」とも言っている（181ページ）。

③『社会力（いきるちから）が危ない』（学習研究社 2001年11月）は、第 5 章をのぞき、①雑誌、講演、対談の記録である。そのため、臨場感があり、子どもの社会力を育てるため「ではどうすればいいか」に答えてくれる。第 6 章と 7 章では2002年度から始まる、総合学習を「社会力」育成カリキュラムとして評価し、かつ学力低下論を批判する。

先天的に備えてはいるが、教育・体験によってしか発揮・解放されない「社会力」を育成された子どもは成績も伸びている、と研究調査結果からも明らかにしている。

そして、「人は人の中でしか人になれない」（生物としてのヒトは人間の間で、その自然・社会・時代の人間となる）、昔から言われてきたあたり前のことにたどり着く。

3．何を学ぶことができたか

これら、3 冊の本の主張・提言に私は、ほぼ全面的に賛同するし、教えられることも数多い。複合発達阻害を受けている、ヒトとしての子どもたちが、それでも喚起力を発揮しようと［マスメディア］の中に、野性性を発揮している悲劇から救出の道筋がある（拙論「日本・中国子どもの行方―日中学術共同調査から見えてきたもの」『九州教育学会研究紀要』2000年 6 月）。

近代心理学批判を繰り返して来た、V.E.フランクルの人間観とも共通するものがある。「社会力」を「社会生活を営む人々のある状態をいうのではなく、社会というものを作り上げていく人間の側の能力と意欲など」（新書62頁）とすれば、主体形成論とも共通してくる。

「社会力」概念のさらなる深化と「社会力」形成にむけてのプログラム作成が必要とされる。

その点と関係して、以下の 3 点を私なりに提案しておきたい。

第 1 は、人間形成においては自然との関わりが否定できないし、社会力、自然力を含んだ〈関係力〉という概念からの展開が必要ではないかということである。

第 2 は、コミュニティづくり（門脇氏は地域社会と意識的にわけておられる）における活動の大切さは賛同するけれども、分断・孤立化した子ども・大人社会にあって、校区を中心とした重層的校区教育コミュニティ（複数のコミュニティの重層化）づくりに展望と具体性が見出せないかということ。

この点については、私にとって20代からのフィールドである福岡県岡垣町で『岡垣町人づくり推進計画』（2001年 3 月）を提案している。

第 3 は、民間 NPO 活動、市民活動と行政、学校・社会教育・福祉の協同活動に期待できるが、行政がよほ

ど注意深く、市民活動育成の条件整備がされないと、結局従来型の［行政主導・網かけ型］管理体制になってしまう危険性である。

私たち九州教育社会学研究者（代表故矢野峻九大名誉教授）は1979年に『だれが教育を担うべきか―家族・学校・地域のつながりを求めて―』（西日本新聞社）を出し、「家族、学校、地域の教育力」概念を提起した。

20年前の書評で、久冨善之氏（一橋大学）と評価が正反対に出され、門脇氏から我々は酷評されそれに反論した経過がある。しかし、今三者は同じ課題意識のところに立っていると思われる。

この20年間の研究と実践の回路を省みるとともに、地球市民の未来を今後とも九州から考えていきたいと思っている。　〔岩波書店、1999年、740円〕

（福岡県立大学人間社会学部　森山　沾一）